



地震発生直後の天文科学館周辺

# 震災 復興 飛躍



大蔵海岸に設置した  
明石震災のモニュメント  
「明日(あした)」





兵庫県南部地震明石市5周年誌

# 震災 復興 飛躍

発行日／平成12年(2000)1月17日

発行／兵庫県明石市

編集／市長室広報広聴課

制作／神戸新聞事業社



S  
T  
R  
I  
C  
T  
L  
Y

市長あいさつ	1
<b>被災状況</b>	
天文科学館	2~3
明石公園	4~5
教育施設(藤江小学校体育館、市立図書館、文化博物館)	6~7
倒壊建物(マンション、本松寺、家並み)	8~9
暮らし(避難所、臨時給水場、カセットコンロ配布)	10~11
復旧(家屋取り壊し、ガス復旧工事、がれき回収作業)	12~13
救援(救援物資、市バス、臨時客船)	14~15
仮設住宅(建設状況、ケアネットによる高齢者訪問)	16~17
ボランティア(炊き出し、義援金)	18~19
<b>復興への息吹</b>	
天文科学館大時計稼働、天文科学館復旧工事、談話(元館長・河野健三さん)	20~21
魚住浄水場配水塔、水道復旧工事、談話(管工事業協同組合・松尾一雄さん)	22~23
現在の花園小学校、同校被災状況、談話(元校長・長谷川達雄さん)	24~25
災害市営住宅、仮設住宅でのクリスマス会、談話(元仮設住宅自治会長・西川浩民さん)	26~27
碑(明石公園、銀座通り)	28
<b>あれから5年</b>	
朝霧地区	29
明石城櫓	30
月照寺山門	31
<b>震災を乗り越えて</b>	
防災訓練、自主防災組織、備蓄倉庫	32~33
大蔵朝霧線、藤江鳥羽線、二見土山線	34~35
大蔵海岸、亀池、金ヶ崎公園	36~37
海峡まつり、中尾親水公園、明石クリーンセンター	38~39
天文科学館	40
資料編	41~49



## 市長あいさつ

明石市長

岡田進裕



平成7年(1995)1月17日午前5時46分に突如として起こった兵庫県南部地震は、先人たちや私たちが営々と築き上げてきた「ふるさと明石」を破壊し、26人の貴い市民の命を奪いました。

未曾有の大災害は、私たちに厳しい試練をもたらしました。しかしながら、被災にくじけることなく、市民みんなが力を合わせ、立ち上がろうと懸命に生きる姿は、今なお鮮明なまま記憶に残り、生涯忘れることはありません。

地震直後からの復旧事業、そしてその教訓を後世に伝える「災害に強いまちづくり」に向けた諸施策で、明石市は力強い復興を成し遂げました。

復興までの5年間、市民一人ひとりの復興への取り組み、そして多くのボランティアをはじめ、全国からいただきましたご支援に、改めて心より感謝申し上げます。

本誌では、震災から立ち直り、さらに躍進する明石市の様子を振り返っています。震災復興にご尽力をいただいたみなさまに、ご高覧いただければ幸いです。



避難所で市民を激励する岡田市長





1か月間、5時46分を指したまま止まっていた天文科学館大時計



# 被災状況



かなりの重量がある望遠鏡の転倒が揺れの激しさを物語る

## 天文科学館

平成7年(1995)1月17日午前5時46分。地震発生時刻で止まった天文科学館の大時計。

地域の人や同館南側を走る電車の乗客が、毎日楽しみのように眺めていた、日本標準時を刻む大時計は、地震を境に惨事を伝える象徴となったのです。

しかし、その後の天文科学館再開への道のりは、市民の願いに後押しされるかのように着実に進められました。地震の象徴は、時間の経過とともに、復興の象徴へとなっていました。

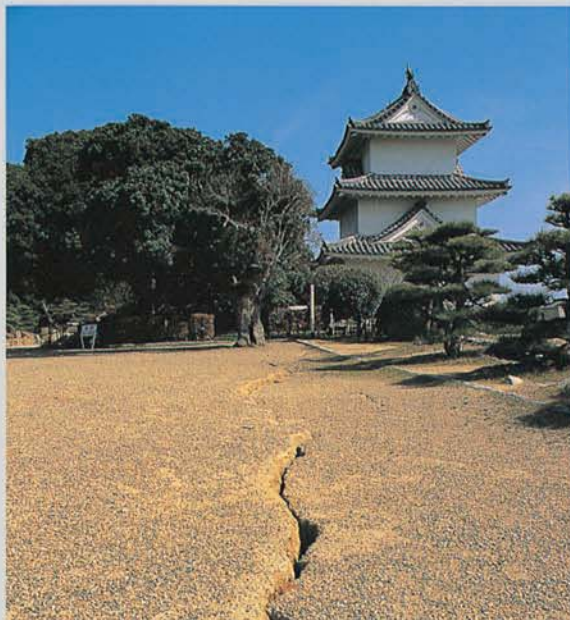


天井や壁が崩れ、鉄筋がむき出しになったらせん階段









## 明石公園

薫る緑がやすらぎを与え、2つの櫓が歴史を伝える明石公園は、訪れる市民の心を和ませてくれます。

100年以上の歴史が刻まれた、この市内最大の憩いの空間も、約20秒というわずかな間に、無残な傷痕を負わされました。市街地を見下ろすようにそびえ立つ両櫓や美しい曲線を誇っていた石垣が、一瞬にして壊されたのです。

地面を2つに割るかのような亀裂

石垣が崩れ落ちた外堀







6



## 教育施設

素直で、時に揺れ動く子どもたちを、いつも変わらず迎え入れていた学校が——。

元気な声がこだまする、子どもたちの大好きな教室、体育館、運動場の傷は、どれほど深く子どもたちの心を傷つけたか、大人では計り知ることもできません。それでも、子どもたちはお互いに励まし合って、一生懸命に悲しみを乗り越えようとしてきました。こんな子どもたちのけなげな姿が、復興を陰で支えていたのかもしれない。

また、市立図書館や文化博物館の復旧のための休館で、平穏な暮らしの中で文化を享受できることのすばらしさを改めて考えさせられました。



市立図書館

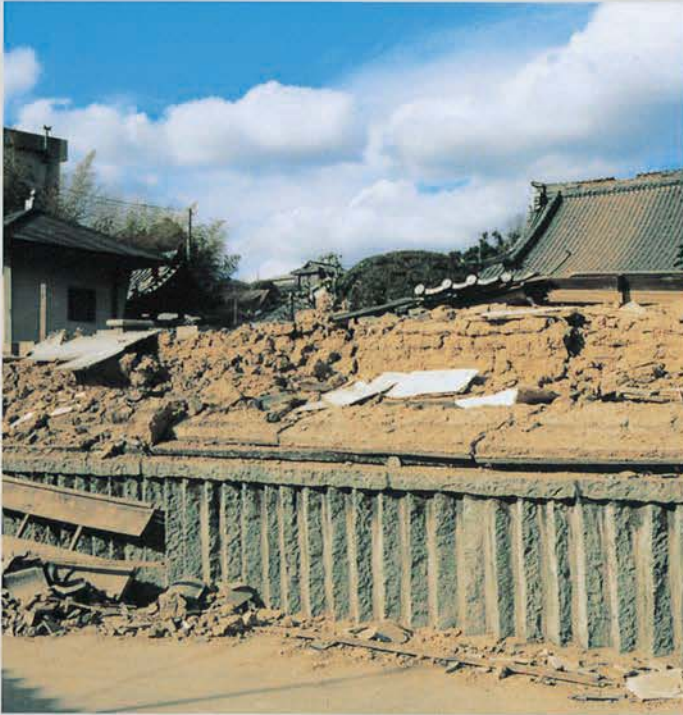
文化博物館











周囲の塀が崩壊した本松寺(上ノ丸1丁目)

## 倒壊建物

地震発生直後、阪神地区や淡路島の被害が想像を絶するほど壊滅的であったために、明石の被害状況が全国に伝えられることはあまりありませんでした。しかし、市民からの通報や市職員らによる家屋調査などで、刻々と被災状況が明らかになり、被災世帯は、全壊4,239世帯、半壊10,957世帯、一部損壊35,618世帯と、市内全世帯の約半数にあたる5万世帯以上にも上りました。

明石市内の家屋の被災は、阪神間のように目に見える形になりませんでした。建物の外観は保たれているものの、内部や基礎は外観からは見当もつかないほど損壊していたというのが、明石の被災家屋の特徴でした。

路上にまで倉庫内の積み荷が飛び散った(西新町1丁目)









## 暮らし

家が壊れる、水、ガスが出ない、交通手段が閉ざされる。突然襲った恐怖と不便な生活で路頭に迷いながらも、被災した市民は、一日一日を懸命に生きていました。

1月17日当初から市が開設していった避難所は28か所、1日の最大収容人数は3,369人に上りました。市は、避難所に食料や毛布などの生活用品の供給に加え、体力の消耗が心配された高齢者や障害者、乳幼児の健康状態の把握にも努めました。

「一刻も早く、好きな物を食べ、お風呂に入りたい」。被災した市民が望んだのは、地震発生まで当たり前のように入っていた事でした。



臨時給水場では水を求める市民が途絶えなかった(市役所)



ガスが出ない市民にカセットコンロを配布(市民会館前)





西施



## 復旧

「暮らしに平穏が戻るのはいつの日か」。毎日毎日、そんな思いを抱えながらも、パニックに陥ることなく冷静さを保った市民の行動が、各方面での復旧を助けてきました。市も、日ごとに進む水道復旧の一方で市内の学校などに臨時給水場を設けたり、予想以上の被害で困難を極めたガス復旧工事中にカセットコンロを配布するなど、復旧作業の側面支援を続けました。さらに、いち早く実施した、がれき回収や震災によるごみの受け入れには、「まちの傷痕だけでなく、沈んだ気持ちも和らいだ」といった声も寄せられました。

ガス復旧工事(大明石町2丁目)

がれき回収作業(大蔵天神町)







市役所には全国から救援物資が届けられた





明石市バスは神戸市に鉄道の代替運行便を送り、被災者を助けた(長田区)

## 救援

地震直後から市民や食料品店を営む人たち、あるいは市外から救援用の食料が次々に市役所に届けられました。届いた温かいご飯を、市職員らがおにぎりにし、避難所に届ける、といったリレー搬送が続けられました。

交通では、鉄道の不通を補うべく、明石港から神戸への臨時客船が運航され、通勤、通学の市民の足を守りました。さらに、市バスは、道路損壊や大渋滞という悪条件の中、翌日の1月18日から一部を除いてほぼ平常運行を続けながら、臨時便も運行しました。さらに市バスは、1月末から3月末まで山陽電鉄(東垂水～西代)やJR(住吉～灘)で鉄道代替バスとして、被災地の交通を助けました。



明石港から神戸港へ出航する臨時客船は通勤、通学の貴重な交通手段となった









保健婦らが訪問し、高齢者の健康状態を確認（明石公園）

## 仮設住宅

家を失った市民が最も望んでいたのは、元の自分たちの家での暮らしだったに違いありません。しかし、家再建のための膨大な費用や再建までの時間を考えると、一時も早く家族で暮らすことが当面の願いだったのではないのでしょうか。

市は、市営、県営、公社、公団住宅など131戸の仮住宅を確保するとともに仮設住宅の建設に着手しました。1月29日午前から中崎1丁目のテニスコートで工事を始めたのを皮切りに、市内13か所で856戸を建設しました。また、仮設住宅への入居が始まった直後から、市と医療、保健、福祉の各機関が連携して「仮設住宅ケアネット」を組織し、高齢者や障害者の支援に取り組みました。



急ピッチで建設が進められた（藤が丘2丁目）







## ボランティア

6,400人を超える死者を出し、都市の機能を奪った兵庫県南部地震。癒されることのない大きな悲しみの中で、被災者に希望の灯をともしたのがボランティアでした。地震直後から、大勢の人がボランティアとして駆けつけ、被災地での支援活動に携わりました。明石市でも延べ3,400人が様々なボランティア活動を展開し、被災した市民を勇気づけました。

また、小学生から高齢の人まで多くの人たちが、少しでも被災者のために役立てて欲しいと、義援金を届けに次々と市役所を訪れていました。



友だちとおこづかいを出し合い、義援金を届けてくれた小学生たち  
(市役所)

温かい食べ物に思わず笑みが(大蔵中町)







SEIKO TIME

明石市立天文科学館

5.46.00  
SEIKO Sports Timer

明石市立天文科学館

大時計稼働式

震災3周年の平成10年1月17日午前5時46分、天文科学館の新大時計が稼働



# 復興への息吹



天文科学館再開に向け行われた新大時計の取り付け工事(平成9年6月18日)

「天文科学館は再建できるのか」。震災当初、同館職員ですら想像がつかなかったといいます。1年がかりの再建計画策定の後、約40億円を要した復旧作業で、地震発生から3年2か月で見事に復活、市民が待ち望んだ雄姿を見せてくれました。



元天文科学館館長  
河野健三さん

あと2か月半で退職という時の出来事でした。「館が倒れていないか」。家から館に着くまで、それしか頭にありませんでした。館はいつものように建っていたものの、外壁や館内の亀裂を見て、天文科学館に勤めた35年間で否定されたように感じ、全身の力が抜けたのを覚えています。私が在職するわずかな期間では、大時計の針を動かすことしかできませんでした。何も決まらないまま退職を迎えた日、今でも表現しようのない、複雑な心境でした。

あれから5年。今、楽しそうに館を訪れる人を見て、震災前の気持ちを取り戻しています。「明石のシンボル、天文科学館に長く勤めることができ、本当に良かった」と。





より安定した水供給のために建設した魚住浄水場内の配水塔





昼夜を問わず進められた水道復旧工事（東人丸町）

市域の約7割で断水を余儀なくされた中、市水道部は、全力を挙げて復旧作業に取り組み、当初の目標通り2週間でほぼ復旧を終えました。



明石市管工事業協同組合理事長  
松尾一雄さん

「一日でも、一軒でも早く水を出したい」。水道本管は市が、家庭の宅内管は組合員（工事業者）が担当するため、常に連絡を取り合いながらの作業でした。作業箇所の多さに交通渋滞も加わり、昼夜を問わず作業に追われていました。作業の合間に2時間程度睡眠をとるという毎日で、いつ終わるのか予想もつきませんでした。

激務を支えたのは、水が出た時のみなさんの喜ぶ表情でした。人が生きるために最も大切な水にかかわる者として、あの時の教訓は生かし続けなければならないと、今なお実感しています。









震災直後の花園小学校。壁のはく離や亀裂が生々しい

すべての学校、園が被害を受けた中、甚大なダメージを受けた花園小学校は、校舎の一部建て替えを余儀なくされました。2年間続いた仮設プレハブ校舎での生活にも、子どもたちは、くじけることなく明るい笑顔を見せていました。



元花園小学校校長  
長谷川達雄さん

自宅(加古川市)で大きな揺れを感じた後、「東方面はひどいことに」という直感から、すぐに家を飛び出しました。学校に到着し、校舎を点検していくうち、壁や柱の亀裂を目の前にし被害の大きさを実感しました。

「一日も早い登校」を合言葉に、一般授業の教室に特別教室や幼稚園の一部を確保し、また、教職員らで通学路の安全を確かめました。校舎の傷を子どもたちに見せまいと、教職員全員でダンボールを貼って傷を覆い隠しました。

あの時期は、「教員、保護者、そして地域が一丸となって大切な子どもたちを守らなければ。そして、そのために教育現場は常に危機意識を忘れてはならない」と、自分に言い聞かせる毎日だった様な気がします。









住民同士のふれあいが仮設住宅での暮らしの支えに(仮設住宅でのクリスマス会)

被災し、避難先などから仮設住宅に入居した市民の多くは、一時的な安心と今後の不安の両方を胸に抱いていたといます。しかし、同じ境遇で暮らす人たちの間には、いつしかお互いを思いやり、ふれあう絆が生まれていました。



元東原仮設住宅自治会長  
西川浩民さん  
(左は妻の幸子さん)

仮設住宅内のふれあいセンターの責任者を引き受けたのがきっかけでした。ボランティア経験のある妻に支えられながらの3年半でした。最初のうちは、みなさんとの関係をもつことが、なかなかできませんでした。しかし、次第に打ち解けるにつれて、少しでも力になりたいという気持ちが強くなりました。

ほかの役員と手分けして毎朝、ひとり暮らしの高齢者や病気がちな人の安否確認をし、日中は、ふれあいセンターでみなさんと楽しい会話を交わす毎日でした。平成8年に私の自宅が再建されたのですが、たくさんの人から「出ていかないで」と言われ、その後2年近く仮設住宅にとどまりました。

今でも月に1度、当時の仲間と食事会を開いています。たくさんの人と築いてきたふれあいを、命ある限り大切にしたいと思っています。



# 石碑 後世に伝える



故ジャイアント馬場さん率いる全日本プロレスから贈られた明石公園の石碑



高年クラブ連合会が設置した銀座通りの石碑

銘  
この碑は明石市  
クラブ連合会  
より兵庫皇南  
復興のシン  
建立に  
平成十七  
明



# あれから5年

## 朝霧地区

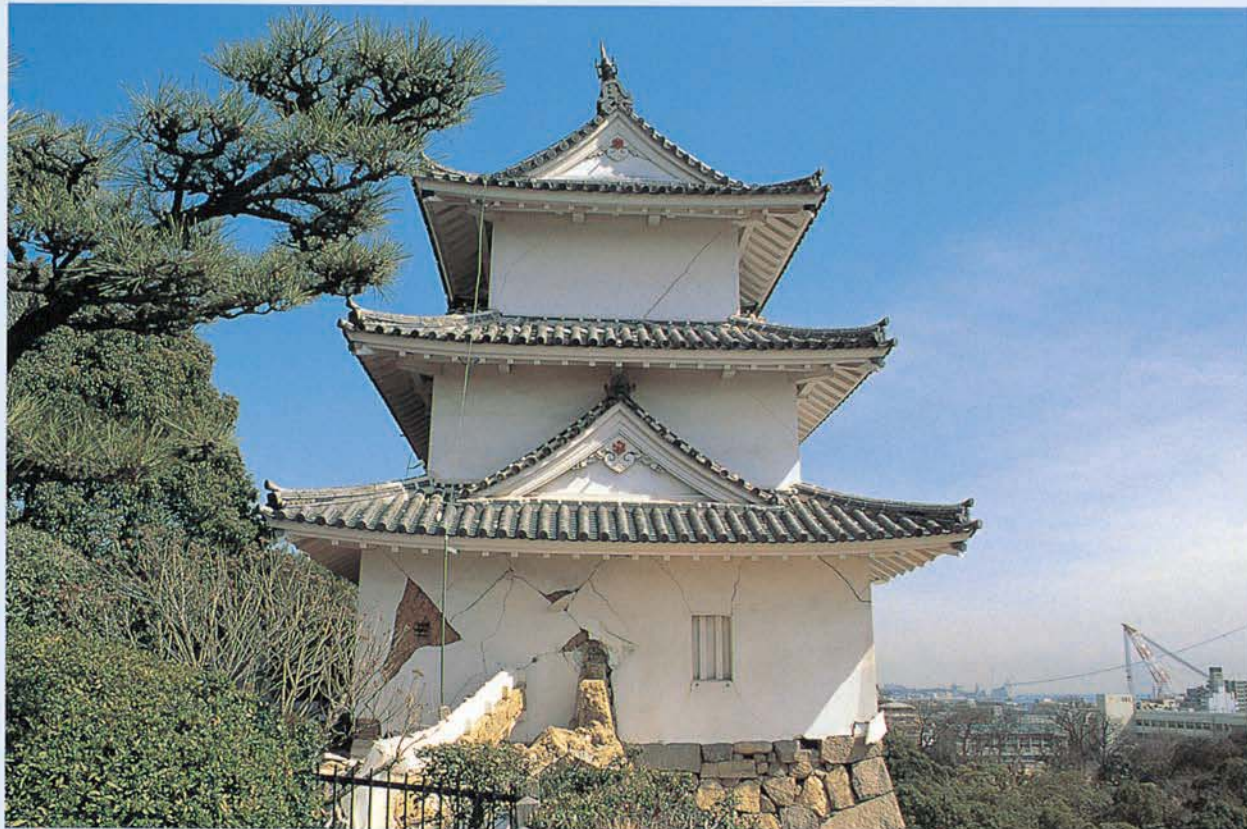
一面にブルーシートが目立つ震災直後(上)、現在(下)は中央に都市計画道路・大蔵朝霧線が開通するなど、まちなみに復興の様子がうかがえる





## 明石城櫓

無残な傷を負った櫓(上)も5年の年月を経て再び蘇った





## 月照寺山門

伏見城の薬医門、明石城の切手門を経て月照寺に移された、歴史ある山門も一瞬にして倒壊した(上)。現在、見事に復活した雄姿が人丸山を飾る









# 震災を乗り越えて



自主防災組織

明石市では、震災を教訓に平成7年12月に「災害に強いまちづくり計画」を策定し、計画に沿って防災機能の強化をはかっています。

海水利用消防システムの導入、防災行政無線の配備を終えたほか、市内10か所に建設を予定する備蓄倉庫が、すでに5か所で完成するなど、市民が安全に安心して暮らせるまちづくりを着々と進めています。

また、震災でその重要性が注目された、地域での助け合いが、緊急時にも生かされるように、地域住民でつくる自主防災組織を育成、支援しています。



備蓄倉庫（朝霧公園）





34

大蔵朝霧線（写真中央の大蔵海岸から大蔵谷インターまで延びる南北道路）





藤江鳥羽線



二見土山線

地震発生当初、道路損壊や通常の何倍もの車両数による交通渋滞で、救急、消火、救援活動が阻まれました。

震災後の明石市では、災害時の緊急活動が円滑に行える、南北道路を中心とする広域的道路網の整備が飛躍的に進んでいます。大蔵朝霧線、二見土山線などが、国道から第2神明道路への利便性の高いアクセス道路となっているほか、山手環状線や藤江鳥羽線などは災害時の防災幹線道路としての役割を担います。

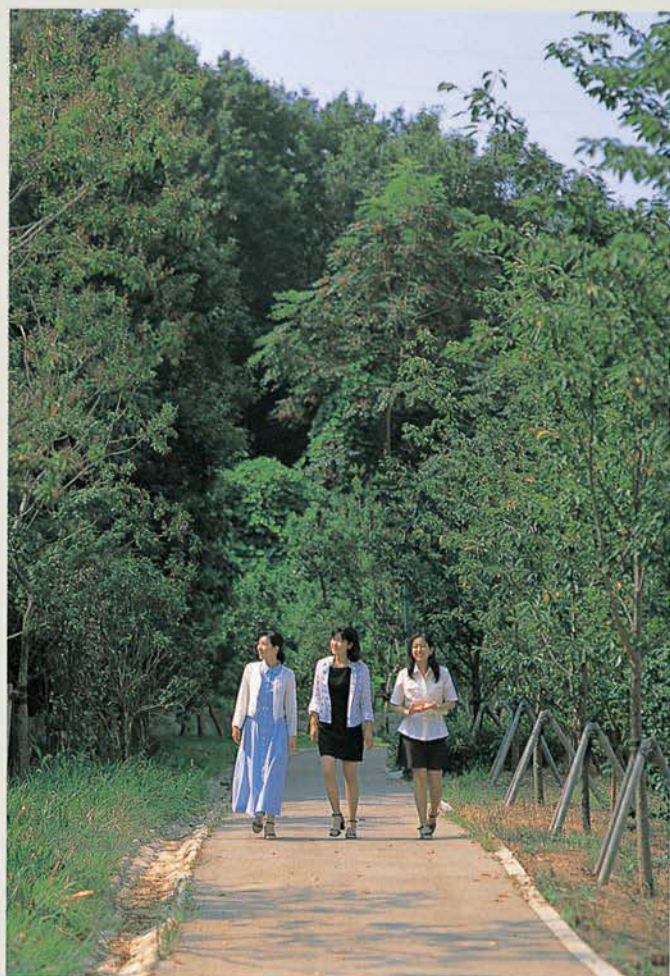








農業用ため池を貯水池として整備した亀池



金ヶ崎公園

都市における水と緑のオープンスペースは、平常時には憩いの場に、災害時には避難地あるいは救援、復旧活動の拠点となりうる、市民の財産です。

約16<sup>キロメートル</sup>の海岸線に沿う明石市には、6河川が流れ、また100か所以上のため池が点在しています。明石市では、これら海岸、河川、ため池で防災対策事業を講じながら親水空間を生み出しています。

中でも、平成10年春、明石海峡大橋の開通に合わせて完成した大蔵海岸は、大きな集客力をもつ海岸公園であるとともに、海岸防災の面で高い機能性を併せもった海岸になっています。





海峡まつり'98フィナーレ(平成10年8月23日、大蔵海岸)





中尾親水公園

明石市では、平成3年度から「第3次長期総合計画」に沿って、21世紀のまちづくりを視野に、様々な施策を推進しています。明石市は、そして明石市民は、震災に屈することなく、一步一步着実に、都市基盤を整え、人と人とのつながりを深めながら、21世紀を迎えようとしています。

さらに、現在策定中の「第4次長期総合計画」では、これまでの成果や教訓の上に立って、ソフト面の施策をより強化し、交流から生まれる活力を生かす「海峡交流都市」の実現をめざします。



新清掃工場、明石クリーンセンター



## 震災を乗り越えて



新たな時代へ時を刻む天文科学館

兵庫県南部地震は、私たちが経験したことのない大災害でした。しかし、私たちが忘れてはならない多くの教訓も残しました。

市民の力を結集し、ひたすら復興への道りを歩んだ5年間。ほぼ震災復興を終えた明石のまちは活気を取り戻し、そして、ぬくもりと潤いを新たに、21世紀に向け時を刻んでいます。





兵庫県南部地震

地震による被害の概要  
災害支援制度一覧  
災害関連事業費総括表



# 兵庫県南部地震

平成7年(1995)1月17日午前5時46分



**震源地** 兵庫県淡路島北部  
(北緯34度36分、東経135度03分、深さ14キロメートル)

**地震の大きさ** マグニチュード7.2

**震度** 神戸、北淡町ほか 震度7  
明石 " 6~7※

※明石市内に気象庁の震度計が設置されておらず新幹線西明石駅の地震計による推計  
(計測震度計設置 H7.3.20消防庁舎)

## I 地震による被害の概要

### 1. 死者、負傷者数

死者：26人(うち神戸市など市外での死亡16人)

重傷：139人、軽傷 1,745人

### 2. 建物(住宅)の被害

全 壊：2,941棟 (4,239世帯)

半 壊：6,673棟 (10,957世帯)

一部損壊：21,370棟 (35,618世帯)



## 3. ライフラインの被害

区分	被害の状況	復旧状況
水道	78,000戸（断水率約70%）	1 / 31 復旧
電気	約100,000戸（全戸停電） 関西電力西神戸変電所のトランス故障	1 / 17 復旧
ガス	24,200戸（明石川以東） 明石川以東で供給停止（閉栓） （カセットコンロ・ボンベ 7,000個配布）	2 / 21 復旧
電話	800回線 直後午前6時～午前7時 通常の50倍の発着コール （避難所へ特設公衆電話41台、FAX24台）	1 / 17 復旧
鉄道	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JR神戸線 西明石～須磨間 全線開通</li> <li>・ 山陽電鉄 明石駅以西 全線開通</li> <li>・ 山陽新幹線（西明石駅営業開始）</li> </ul>	1 / 23 復旧 4 / 1 1 / 18 6 / 18 4 / 8
市バス	市バスの設備には大きな被害なし 信号の停止、道路の陥没、ガス漏れ などの影響により一時一部で運行休止 その後も、道路の通行上、大渋滞な どでダイヤ混乱	[1/21～1/22 高丘・山手台～明石、西明石～明石（臨時運行、JRの代替バス） 1/31～2/10 東垂水～西代（山陽電鉄の代替バス） [3/1～3/31 住吉～灘（JRの代替バス）





## II

### 災害支援制度一覧

項目	対象	内容	件数・金額
市見舞金	家屋の全半壊	全壊4万円(単身世帯2万円)	12,693件
		半壊2万円(単身世帯1万円)	281,440,000円
災害弔慰金	死亡者	主生計者 500万円(5件) 主生計者以外 250万円(13件)	57,500,000円
県災害支援金	家屋の全半壊	全壊 10万円(3,443件)	807,750,000円
		半壊 5万円(9,269件)	
	1か月以上の治療	1万円(86件)、死亡10万円(1件)	960,000円
日赤義援金1次	死亡者	10万円(23件)	2,300,000円
	家屋の全半壊	10万円(12,695件)	1,269,500,000円
日赤義援金2次	1か月以上通院	5万円(86件)	4,300,000円
	重度障害者等	30万円(1,009件)	302,700,000円
	被災児童生徒	1~5万円(1,203件)	34,030,000円
	所得1000万円以下で 200万円以上の修理等	30万円(6,330件)	1,897,415,000円
日赤義援金3次	全半壊で所得690万円以下	15万円(10,450件)	1,566,650,000円







項目	対象	内容	件数・金額
健康診査料免除	全半壊、重篤な傷病、失業による大幅な減収になった40歳以上の人		720件 501,200円
国民年金保険料免除	被災者	平成6年12月～平成8年3月分	3,949件 554,439,600円
水道料金		1月17日以降の検針の1期分	基本 110,130件 152,787,000円
基本料金	全世帯		
従量料金	全壊	全額免除	全壊 1,498件 4,973,000円
	半壊	2分1減額	半壊 6,565件 17,558,000円
納期延長	1月24日～3月6日の納期分		
下水道使用料		1月17日以降の検針の1期分	基本 66,482件 84,898,000円
基本料金	全世帯		
従量料金	全壊	全額免除	全壊 1,403件 4,556,952円
	半壊	2分1減額	半壊 4,883件 12,470,021円
納期延長	1月24日～3月6日の納期分		
保育所保育料	全半壊 多大な損害	平成7年1月分～3月分 全額免除 2分1減額	199件 9,763,400円 1,486件 54,228,850円
市立幼稚園保育料	全半壊	平成6年度分 平成7年度分 全額免除	158件 1,989,000円 296件 22,087,000円
入園料	全半壊	全額免除	171件 598,500円
明石商業高校授業料	全半壊	平成7年1月分～3月分まで 平成7年4月分～8年3月分まで 全額免除	27件 664,200円 74件 7,195,700円 10件 20,000円
考查料	全半壊	全額免除	24件 129,600円
入学料	全半壊	全額免除	





項目	対象	内容	件数・金額
中小企業融資 災害対策利子補給	①事業用建物が全半壊 ②建物以外の資産の損失が前年の事業総収入の10%以上の事業者 ③1月17日以降3か月の売上額または受注額が前年に比べ30%以上減少している事業者	利子補給年1% 補給期間3年間	27件 838,814円
勤労者住宅融資	半壊以上の被災者で勤労者住宅資金融資制度の資格者	災害特別枠を設置 限度額も引き上げ	21件 165,000,000円
借家の応急修理 (持ち家)	家屋の半壊 ・生活保護世帯 ・市民税の非課税世帯 ・市民税均等割りだけの世帯 ・震災による失業、離職者	29万5千円を限度	68件 10,056,985円
(借家)	・震災による失業、離職者 で家主に資力が無い	29万5千円を限度	2件 200,561円
宅地分譲	全半壊	市土地開発公社が大久保町高丘7丁目 で30区画を募集	16区画分譲
賃貸共同住宅 建て替え補助	半壊以上で解体した民間賃貸木造住宅を同一敷地内で賃貸共同住宅に建て替える場合で、高齢者らに配慮した仕様であることなどの条件を満たす人	1戸あたり100万円	10件 111戸 111,000,000円
家賃補助	民間賃貸住宅が解体され、建て替えられた賃貸共同住宅に入居する場合で、公営住宅の収入基準以下の世帯などの条件を満たす人	1月3万円を上限に旧家賃と新家賃の差額を5年間補助	4件 3,915,000円

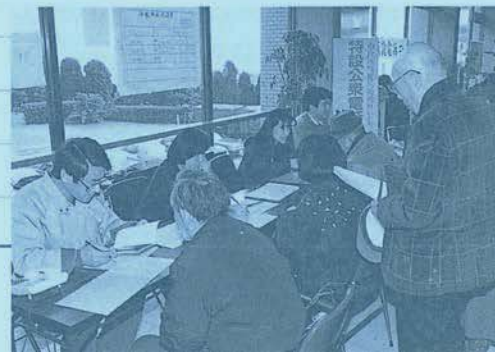




項目	対象	内容	件数・金額
災害援護資金の貸付	全半壊の世帯主ほか	最高限度額350万円 償還10年 利率年3%	1,524件 3,384,000,000円
生活福祉資金の貸付①	住居が一部破損または家財の3分の1未満の軽微な損害を受けた人	最高限度額150万円 償還8年 利率年3%	13件 50～150万円 14,950,000円
生活福祉資金の貸付②	世帯員が負傷、住宅損傷などで生活困窮	最高限度額10万円 利率年3% 償還4年以内	225件 22,500,000円
生活福祉資金の貸付③	仮設住宅などから恒久住宅への移転に必要な経費	最高限度額50万円 償還5年以内 利率年3%	75件 31,400,000円
国民健康保険 保険料 一部負担金	平成6年度 8～10期分	全壊	全額免除 1,626件 91,774,000円
		半壊	2分の1減額 1月17日～12月31日 3,394件 88,997,000円
	平成7年度	全壊	1,920件 310,796,800円
		半壊	3,634件 301,392,600円
	①全壊、半壊、世帯主が死亡 ②世帯主が1か月以上の治療を要する ③世帯主が業務を廃止し、または休止した世帯 ④世帯主が失職し現在収入がない世帯	1月17日～12月31日 1月17日～9月30日	免除申請数 3,182世帯 (6,294人) 延件数 47,718件 239,577,000円
老人保健医療費 一部負担金	①老人保健医療費受給者本人か世帯の主たる生計維持者が、全壊、半壊、死亡、重篤な傷病を負った人	平成7年12月31日まで	免除者数 2,885人 25,581,619円
訪問看護ステーションの基本利用料	②事業または業務の休業等により著しく収入が減少した人		
入院時食事療養費の標準負担額	③失業等で著しく収入が減少した人		



項目	対象	内容	件数・金額
市税 個人市民税	納付書による個人納付…平成6年度4期分と平成7年度の年税額 給与から天引きで納付…平成7年2月から5月引き去り分と平成7年度の年税額	(1) 納税者本人が死亡 (2) 納税者本人が障害者になった (3) 納税者の所有(居住)する家屋や家財等に 損害を受けた場合	全額免除 10分の9を軽減 下表のとおり
	前年中の所得金額	被害程度	合計
		10分の5以上 (全壊)	10分の3以上 10分の5未満 (半壊)
			※10分の3 未満 (全半壊以外)
	300万円以下	全額免除	2分の1軽減
	300万円超 500万円以下	全額免除	2分の1軽減
	500万円超 750万円以下	2分の1軽減	4分の1軽減
	750万円超1,000万円以下	4分の1軽減	8分の1軽減
			平成6年度 7,034件 26,551,000円
			平成7年度 101,387件 749,368,000円
固定資産税・ 都市計画税		下表のとおり	
	損害の程度	減免割合	損害の程度
	10分の8以上	全額免除	全壊
	10分の6以上10分の8未満	10分の8軽減	半壊
	10分の4以上10分の6未満	10分の6軽減	※全半壊 以外
	10分の2以上10分の4未満	10分の6軽減	
	償却資産	10分の2以上	損害割合を軽減
			合計
			平成6年度 7,450件 45,267,000円
			平成7年度 64,883件 1,099,070,000円
固定資産税・ 都市計画税の 評価額の減額		震災の影響が広範囲に及ぶことから、平成7年1月17日以前に建築したすべての 家屋を対象に、最低100分の3の評価額を減額(平成8年度以降)	※は平成7年度のみ適用
納期変更		震災の影響を考慮し、個人市県民税、固定資産税の納期を変更	
特例措置		被災した家屋に代わるものを取得したり、改築した場合に、固定資産税・都市計画 税を軽減する特例を実施	





## III

## 明石市の災害関連事業費総括表

(単位:千円)

年度	項目	事業費	主な施策等説明
平成6年度	一般会計事業費の計	3,342,389	
	災害救助費	1,584,521	・災害援護貸付金(800,000),災害見舞金(200,000)
	災害復旧費	1,605,217	・学校施設、天文科学館、文化博物館災害復旧費(447,729)
	災害関連経費	152,651	・災害廃棄物処理費(654,049)
	特別会計・企業会計の事業費の計	701,111	・(歳入)市税等災害減免(152,651)
	会計間の純計	△44,412	・(〃)国民健康保険料等災害減免(335,490)
	事業費総額	3,999,088	
平成7年度	一般会計事業費の計	20,336,363	・災害援護貸付金(2,584,000)
	災害救助費	2,784,389	・農業施設(ため池等)災害復旧費(1,066,181)
	災害復旧費	10,484,837	・漁港 " " (1,038,884)
	災害関連経費	7,067,137	・道路橋りょう " (1,600,175)
	特別会計・企業会計の事業費の計	1,331,732	・災害廃棄物処理費(4,672,558)
	会計間の純計	△100,185	・災害公営住宅建設(1,344,876)
	事業費総額	21,567,910	・(歳入)市税減免(3,795,045),国保料等減免(721,695)
平成8年度	一般会計事業費の計	9,142,856	
	災害救助費	1,740	・学校施設、天文科学館、市文化財災害復旧費(1,817,438)
	災害復旧費	3,321,806	・災害廃棄物処理費(652,961)
	災害関連経費	5,819,310	・災害公営住宅建設(4,288,954)
	特別会計・企業会計の事業費の計	300,714	・防災公園(朝霧、上ヶ池、望海浜 230,086)
	会計間の純計	0	・上水道施設安全対策推進(224,041)
	事業費総額	9,443,570	
平成9年度	一般会計事業費の計	5,219,962	
	災害救助費	8,690	・天文科学館災害復旧(2,387,634)
	災害復旧費	2,409,482	・防災無線整備(104,606)
	災害関連経費	2,801,790	・災害公営住宅建設(2,271,693)
	特別会計・企業会計の事業費の計	288,258	・耐震性防火水槽整備(105,726)
	会計間の純計	0	・飲料用耐震性貯水槽(60,886)
	事業費総額	5,508,220	・上水道施設安全対策推進(207,724)
平成10年度	一般会計事業費の計	436,600	
	災害救助費	18,430	・市指定文化財災害復旧助成(49,750)
	災害復旧費	49,750	・勤労者住宅融資(枠拡大分)(46,500)
	災害関連経費	368,420	・埋蔵文化財発掘調査(復興促進)(118,000)
	特別会計・企業会計の事業費の計	174,513	・上水道施設安全対策推進(174,513)
	会計間の純計	0	
	事業費総額	611,113	
平成11年度	一般会計事業費の計	366,214	
	災害救助費	58,900	・耐震性防火水槽整備(40,224)
	災害復旧費	0	・自主防災組織活動支援(資機材、運営)(41,750)
	災害関連経費	307,314	・埋蔵文化財発掘調査(復興促進)(80,000)
	特別会計・企業会計の事業費の計	154,190	・上水道施設安全対策推進(154,190)
	会計間の純計	0	
	事業費総額	520,404	
	災害関連事業費の総額	41,650,305	

※ 平成6年度から平成10年度は決算額、平成11年度は9月補正後の予算額による。

※ 平成6年度、平成7年度は、一般会計から特別・企業会計への繰出金が、総事業費として重複計上となるため、合計額から控除している。





地震発生直後、市民が最も困ったのは、水、食料、そして安心して暮らせる家、という最低限の生活手段でした。その次に必要になったものは、「情報」でした。本文中でも述べましたが、阪神間や淡路島の被害があまりに大きかったため、明石市の状況はテレビやラジオなどで、あまり取り上げられませんでした。明石市では、広報車による巡回に加え、ほかの被災地に先駆けて号外広報紙を発行するなど、できる限りの情報伝達に努めました。

あの時のことを思い起こすと、危機管理体制の確立には確実な情報伝達が欠かせないことを改めて実感します。情報公開が進む今、緊急時に大きな役割を担う行政と市民のコミュニケーションを、平常時から育てていかなければなりません。

「市民の求めるものは何か、市が提供すべきものは何か」。震災は、素朴で基本的なメッセージを私どもの広報活動に残しました。21世紀という新たな時代を目の前にし、多様な価値感が求められる今、安心して暮らすという生活の根底を、行政が、そして市民一人ひとりが、もう一度見直す時期ではないかと、この小冊子の編集を通して感じました。

市長室広報広聴課







兵庫県南部地震  
明石市5周年誌